大学生の雪上実習体験満足度とスキー動機の関連性についての研究

三宅　弘祐　（生涯スポーツ学科　野外スポーツコース）
指導教員　林　綾子

キーワード：スキー，体験，満足度，動機

１．　緒言

現在，スノースポーツの代表であるスキーの人口は減少傾向にあり，スキー業界全体がその影響をうけている．よって指導現場においてもスキー集客に対して考える必要がある．

スキーは教育活動として数多く行われていることから，その活動から自主的なスキー活動として繋げることができないかと考えた．過去のレジャー体験がレジャーの継続に影響を及ぼす[4]とされていることから，スキー実習に対するポジティブな評価と自主的なスキー活動に関連性があるのではないかと考えた．

本研究は，過去のスキー実習体験に対しての満足度と自主的にスキーを行う要因であるスキー動機との関連性を明らかにすることを目的とする．

２．　研究方法

【調査対象】

平成25年10月上旬～11月中旬に，B大学に所属する３，４年生に対しゼミごとに調査用紙を配布し，後日回収を行った．有効回答数は240名（有効回答率45．6%）であった．

【調査方法】

①雪上実習満足尺度：雪上実習での満足度を測定するために，會田ら[1]が作成した「スキー実習満足感調査」を筆者が修正したもの（8因子27項目）を使用し調査を行った．

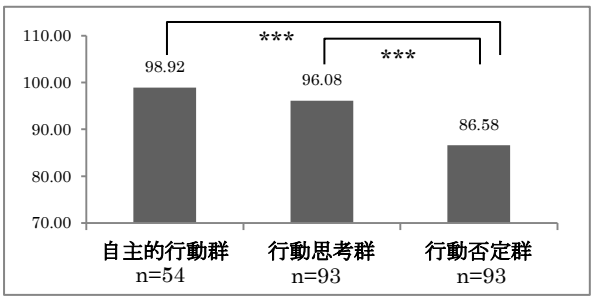
②スキー動機尺度：スキーを行う動機を調査するため，小林[3]が作成した「登山者の動機」を参考に筆者が修正したもの（7因子21項目）を使用し調査を行った．

③スキー活動の阻害要因：スキーに関わる阻害要因を調査するため，飯干ら[2]の論文を参考に８つの質問項目と自由記述形式によって調査を行った．

３．　結果と考察

①雪上実習満足度を自主的行動群（以下Ｖ群），行動思考群（以下Ｂ群），行動否定群（以下Ｎ群）間において１要因の分散分析を行った結果有意な差がみられた（$F(2,236)=21.81$，$p<.001$）ため，多重比較を行った．（図１）．

その結果，Ｖ群－Ｎ群間とＢ群－Ｎ群間に有意な差がみられた．よって，雪上実習での満足度が高ければその後の自主的なスキー活動を行う傾向にあることが明らかとなった．また，因子別による分散分析，多重比較の結果，Ｖ群－Ｎ群間とＢ群－Ｎ群間において指導講習，技術向上，環境施設，新奇体験，自然体験，友人関係，実習総合評価に有意な差がみられた（$p<.05$）．よって，以上のような満足が高い人ほどスキーに行きたいと思うことが明らかとなった．



***＝$p<.001$

図１：自主的行動別雪上実習満足度得点

②スキー動機の因子内得点を算出し，因子間の平均の差を１要因の分散分析を行った結果，技術向上欲求が特に高い動機であることが明らかとなった（$F(6,1015)=71.55$，$p<.001$）．　よって，スキーに行きたいと思う人は，スキー技術向上に対しての欲求が強いことが明らかになった．

③阻害要因の調査の結果，「ゲレンデが遠い」「お金がかかる」「学業で忙しい」「スノーボードをするから」「寒いから」が主な理由であった．

④雪上実習満足度因子とスキー動機得点の相関係数を算出したところ，技術向上（$r=.224$ $p<.01$），環境施設（$r=.202$ $p<.05$），新奇体験（$r=.260$ $p<.01$）が有意な正の相関を示した．高いスキー動機には，スキー体験でのスキー技術向上，環境や施設，新奇的な体験の満足度を高めることが重要であること思われる．

４．　まとめ

本研究の結果より，自主的なスキー活動は過去のスキー満足度が影響していることが明らかになった．スキー人口増加のため，スキー指導者はレベルに合わせたスキー技術向上に加え，冬の雪山でしか味わえない体験をさせること，また周辺施設の充実やゲレンデの面白さなどにも満足させることが重要であると考えられる．

引用文献

１）　會田宏・中西匠・野老 稔・二宮 恒夫(1997)スキー実習における授業評価の構造．武庫川女子大紀要人文・社会科学（45）：p．49-55.

２）　飯干明・奥保宏・南貞己（2003）大学生における運動・スポーツの実施状況と阻害要因に関する調査研究．鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編（54）：p．21-31.

３）　小林昭裕（1993）大雪山国立公園を事例とした登山者の満足度，動機および回答者の特性間の関連性．造園雑誌（56-5）：p．175-180.

４）　ロジャーCマンネル・ダグラスAクリーバー・監訳 速水敏彦(2004)レジャーの社会心理学．世界思想社:京都，p．158-184.